

榎一雄博士の御逝去を悼む

護 雅 夫

前東洋文庫理事長・東京大学名誉教授榎一雄博士は、あと僅か六日で喜寿の賀を迎えられようとしていた一九八九年十一月五日の午後、御自宅の書齋で心不全のため倒れ、ついに不帰の客となられた。心臓病を宿病とされてはいたが、亡くなる前日には、東洋文庫で研究に没頭し、文庫員と元気に会話をかわされていたというから、まことに突然の御逝去であった。深い悲しみと痛惜の念とに耐えない。

博士は、一九一三年一月一日、現在の神戸市垂水区垂水で呱呱の声をあげられたが、御尊父のお仕事の関係で、神戸市へ、ついで、一九二二年、横浜へ移り、ここで少年時代を過ごされた。博士は、「榎博士頌寿記念東洋史論叢」（汲古書院、一九八八年）の巻頭に付された「自訂略年譜」のなかで、御尊父について「英・支・露を始め諸国の語をよくしたるほか、筆蹟殊に見事なりき」としておられるが、私は、その言葉を、そのまま、後年の博士に呈したいと思う。

博士は、一九三一年三月、神奈川県立横浜第三中学校を

卒業されたが、「略年譜」によれば、博士が東洋史に興味を感じ、その研究に志されたのは、すでに、中学校に在学中のことであったという。

博士は、中学校を卒業後、第一高等学校文科丙類に進まれた。博士は、高等学校在学中、すでに「資治通鑑」を通読されていたとか、いや、それは「史記」・「漢書」・「後漢書」・「三国志」だとか、或いは、それは「二十四史」全部だとか、さまざまに伝えられている。学者にとどまらず、何事においてであれすぐれた人々にはいろいろな「伝説」がつきまとうもので、私は、博士の御在世中に、この真偽のほどをおうかがいする機会をついに逸した。たとえうかがったとしても、博士のことだから笑って答えられなかったとは思いますが、博士が、遅くとも高等学校時代に、東洋史について人並みならぬ深い造詣をそなえておられたことは、疑うべからざる事実であるに違いない。博士の高等学校での同窓生で、かつて大蔵大臣をつとめられた村山達雄氏は、何時だったか、私に、「とくに漢文にかけては、榎君にかなうものはいなかった」と述懐されたことがある。

博士は、一九三四年四月、東京帝国大学文学部東洋史学科に入学し、池内宏・和田清・加藤繁諸博士の薫陶を受けられることになったが、同年一二月に御尊父の逝去に遭われた。博士は、「略年譜」に、「その後、家道困難を極めた

るも、恩師・先輩・友人の温かき激励を得て、辛うじて、業を卒うるを得たり」、また、「家道衰微の中に在って奮闘し、我及び我が弟妹をして成立に至らしめたるは、偏に母の力なり」とのべて、そのころ管められた御苦勞を回顧し、母君への感謝の念を表明しておられる。

博士が東京帝国大学を卒業されたのは、一九三七年三月のことであった。一九四〇年に、『蒙古学報』に発表された「王韶の熙河経略に就いて」は、博士の卒業論文の一部であると聞いている。

博士は、大学を卒業された一九三七年の四月に財団法人東洋文庫の研究生見習となり、同年一月に研究生に昇格されて、当時の同文庫理事兼研究部長白鳥庫吉博士の助手として、同博士の中央アジア史研究を助けるとともに、御自身の東洋史、とりわけ中央アジア史に関する研究について研鑽を積まれた。

博士は、同年一九三七年四月、第一高等学校講師となつて、東洋史概説を講じ、一九四二年三月には教授に任ぜられて、東洋史概説のほかに漢文の講義をも担当し、翌年一九四三年九月から、講師として東京帝国大学文学部に出講されることになった。

一九四五年五月から八月にかけて、米機の米襲にそなえて、東洋文庫の蔵書は宮城県下に疎開されたが、そのさ

い、博士は、同僚の久野昇一・白鳥芳郎・箕輪友吉諸氏などとともに、その荷造り・積み出しそのほかの業務に当たられた。終戦を迎えたのは、チベット文の書籍類を残すすべての図書の疎開が完了したときのことであった。

博士は、一九四七年四月に東洋文庫研究員、翌年一九四八年三月に第一高等学校講師、そして、同年五月に東京大学助教授（文学部勤務）となられたが、一九五〇年三月には第一高等学校講師を辞任しておられる。

これに先立って、東洋文庫は、その基金の中心であった南滿州鉄道株式会社の株券が終戦によって無価値となるにおよんで財政的難局を迎えるに至った。そのため、一九四八年八月に、国立国会図書館が東洋文庫の図書を管理することになって、国会図書館支部東洋文庫が成立し、当時財団法人東洋文庫図書館長であった岩井大慧博士をはじめとする図書部員は国会図書館支部東洋文庫に移つて、岩井博士が図書部長在任のまま国会図書館支部東洋文庫長となられた。これは財団負担の人件費を些かでも軽減しようとの国会図書館の厚意の策であったと聞いている。一九四九年五月には、疎開させていた図書の返還が完了したが、東洋文庫の財政状況では、東洋文庫が外国の新刊図書を購入することは殆ど不可能であった。博士は、これに対処するため、東洋文庫刊行の図書のみならず我が国での出版物との

交換による東洋文庫の蒐書に全力を傾注された。

博士は、一九五二年八月から一九五四年七月まで、イギリス・ドイツ・フランス・イタリアへ出張し、とくに、一九五二―五三年度海外招聘講師として、ロンドン大学東洋・アフリカ研究学校 (School of Oriental and African Studies, University of London) において博士課程の学生に講義するとともにその指導に当たられたが、そのかたわら、大英博物館所蔵の、スタインの将来にかかる敦煌文書中の漢文文書の撮影の許可をとり、当時公開されていた全文書をマイクロフィルムにおさめて、東洋文庫へもたらされた。のちに、博士からうかがったところによると、その許可を得るための博物館当局との交渉には大変苦労されたという。我が国における敦煌文書研究が飛躍的に発展するに至ったのは、ひとえに、博士のこのときの御尽力の賜物であると言ってもあながち誇張ではあるまい。なお、この出張のあいだに、日本協会 (The Japan Society of London)・ケムブリッジ大学・ハムブルグ大学・ミュンヘン大学・イタリア中東亜研究所 (Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente) で講演されたが、博士が、当時ハムブルグ大学教授であったフォン＝ガベン博士 (A. von Gabain) と親交を結ばれるに至ったのは、このときからであったと思われる。フォン＝ガベン博士は、のちに、博

士の配慮によって、東洋文庫名誉研究員となり、一年間、東洋文庫で研究に従事されたが、何時も、このさいの博士の好意を徳としておられた。

東洋文庫では、我が国の東洋史研究において比較的軽視されがちであった近代中国研究の振興をはかるため、一九五三年から、市古宙三氏を中心として、近代中国研究委員会の設立準備が進められていたが、それがロックフェラー財団の援助によって発足したのは、博士が帰国された一九五四年の一月のことであった。同委員会は、そののち、フォード財団・アジア財団の援助をも得て、近代中国研究の推進に大きな役割を果たし、今日に至っている。同委員会の多方面にわたる活動のなかでもとくに注目すべきは、近代中国に関係する図書の蒐集で、その結果、現在、東洋文庫は、我が国における近代中国研究のセンターとして、多くの研究者に多大の便宜を与えている。この蒐集は、市古氏の絶大な努力によって始めて可能であったが、博士が市古氏とともにこの蒐書活動によせられた熱意には、なみなみならぬものがあつた。

博士は、一九五五年一月、東京大学教授 (文学部勤務) に昇任された。このときすでに、博士の東洋史・中央アジア史研究におけるめざましい業績は、国際的にも認められており、その前年一九五四年八月には、ユトレヒト大学教

授であったヤーン博士 (Karl Jahn) の要請を受けて *Central Asiatic Journal* の編輯委員の一人となり、一九七七年までその任に在って、とくに我が国の研究者の同誌への寄稿に努められた。また、一九五五年八月から一九五七年二月まで、インドへ出張し、ニューデリーに新設されたインド国際研究学校 (*Indian School of International Studies*) の教授として、その後の東アジア学科の創設に尽力するとともに、インド全国から募集された博士課程の学生に講義された。「略年譜」によれば、「インドにて東亜学研究の組織的に始められたるはこの時なり」という。

博士は、一九五七年六月、和田清博士のあとを承けて東洋文庫研究部長に就任し、同年七月、日本ユネスコ国内委員会の主催にかかる東西文化交流史に関する国際シンポジウムの準備委員会委員となられた。これが盛會裡に終わるためには、是非とも博士の協力を必要としたからである。

一九五八年度に、「アジア地域総合研究」プロジェクトが、文部省の科学研究費を得て発足し、三か年計画で、アジア各地域の政治・社会・経済に関する総合研究を統合して、研究のために要する基礎的資料を蒐集することになった。東洋文庫は、そのなかで、「イスラム地域の社会構造」の研究を分担し、広く国内におけるイスラム地域の研究者の協力を求めて、アラビア語・ペルシア語・トルコ語の資

料の蒐集に当たった。東洋文庫におけるこの事業を指導されたのが博士であった。丁度そのとき、トルコ共和国に留学していた私は、博士の命を受けてトルコ語資料の蒐集に微力を尽くした。ちなみに言えば、アラビア語資料の選択・蒐集は嶋田襄平氏が、そして、ペルシア語資料のそれは本田實信氏が、主としてこれに当たられた。現在、東洋文庫は、質量ともに、我が国で匹敵するものとしてないイスラム関係資料を擁しているが、それらは、このときの計画で集められた資料を基礎としている。ただイスラム関係資料だけに限っても、博士が東洋文庫の図書の実施のために果たされた役割は限りなく大きいと言わざるをえない。ほかの領域に関する図書については贅言を要しない。

ハーヴァード・イェンチン研究所 (*Harvard-Yenching Institute*) を始めとする内外の諸機関から寄贈された研究費によって、日本をふくむアジア (インドおよびそれ以外) についての日本における人文・社会科学的研究を援助する目的をもって、東方学研究日本委員会が一九五九年に設立されると、博士は、一九六〇年から一九七二年にかけて同委員会の事務を担当し、多くの研究成果・複製資料などの出版に大きく貢献された。そして、一九六〇年一二月には財団法人東洋文庫専務理事に選ばれて、研究部長を兼任し、財政困難を極めていた財団の運営に必要な資金の調達

に、以前にもまして尽瘁されることになった。

博士が我が国とイタリアとのあいだの学術交流の推進に尽くされた功績がイタリア政府の認めるところとなり、一九六一年六月に、コメンゲトローレ・アル・メリット (Com-mendatore al Merito) 勲章を受章し、同年同月に、イタリア中東亜研究所の名誉所員に推された。同年七月、財団法人東洋文庫にユネスコ東アジア文化研究センターが付置されると、博士は、その副所長として辻直四郎所長を補佐されることになった。同センターが東洋文庫に付置されるに至ったのも博士の御努力によるものである。

これにつづく二年間、博士は、その学術活動の多くを海外での講義・講演・蒐書そのほかに集中されることになった。すなわち、一九六二年一月から同年八月まで、メキシコへ出張し、メキシコ市のメキシコ学院 (El Colegio de México) の国際研究科 (Departamento de Estudios Internacionales) で、メキシコで最初の「中国・日本文化」と題する講義・演習を行われた。その間、同市所在の国立古文書館に通い、一七・一八世紀におけるメキシコとフィリピン諸島との貿易に関する古文書約六万枚を撮影し、それに関係する新出版物約三百点とともに東洋文庫にもたらされた。ついで、同年一〇月から十一月まで、南ベトナム・マラヤ連邦・タイ・ビルマ・インド・香港・シンガポ

ールへ出張し、それぞれの文化的相互理解の促進のための協力方法について協議された。そのさい、バンコックの日本大使館につとめておられた石井米雄氏の案内で、司法省破産(管理)部のチャラス・ピクル氏 (Charas Bikit) の蔵書の一部に目を通されたが、これは、のちに、石井氏の斡旋によって東洋文庫の蔵するところとなった。そのうち、東洋文庫所蔵のタイ語文献は次第に増加し、現在では、約一千冊を数えるに至っているが、これが、このときの蒐書を基礎にしていることを思えば、タイ語文献の蒐集に関しても、博士の寄与されたところ甚だ大であると言い得るであろう。なお、同年三月三十一日には、「エフタル勃興前後の中央アジア」と題する論文によって、東京大学から文学博士の学位を取得された。

これに続いて、その翌年一九六三年には、三月から四月までイタリアへ出張し、ローマのリンチェイ学士院 (Accademia dei Lincei) で開かれた「文明史上における東洋キリスト教世界」を主題とする国際会議に参加して、中国・蒙古・中央アジアにおける中世ネストリウス派キリスト教に関係する遺跡・遺物の最近の発見について講演された。さらに、同年一二月から翌年一九六四年一月まで、インドへ出張し、ニューデリーで開催された第二六回国際東洋学者会議の東アジア部会の議長をつとめられた。「略年

譜」によれば、「この会議はアジアの地にて開かれたる最初の国際東洋学者会議なりしため、主催国インドは東アジア部会の議長として特に日本人を指名したるなり」というが、これは、インドの東洋学界が、博士を、日本人研究者のなかでも際だつてすぐれた東洋学者と認められたためであることは言うまでもあるまい。

博士は、一九六四年六月から財団法人東方学会常任評議員、一九六七年七月から同学会理事、そして、一九七五年七月から一九八五年七月まで、同学会常務理事兼東京支部長として、同学会の健全な発展のために力を尽くされた。

一九六六年四月から一月まで、明治百年記念準備委員会をつとめ、(一)新しい日本人名辞典の編纂・刊行、(二)東洋文庫内の近代中国研究委員会(前述)を中核とする国立アジア近代史研究所の設立、——この二つを提案されたが、これらはいずれも採択されるに至らなかった。とくに後者が実現しなかったことは、博士の、のちのちまで残念としておられたところである。

東洋文庫創立(モリソン [G. E. Morrison] のアジア文庫「いわゆるモリソン文庫」渡来)記念五十周年記念事業の一つとして、一九六八年三月に書庫の、そして、翌年一九六九年一月には研究室の、それぞれ増築が竣工したが、その実現のために、陣頭にたつて寄付金の募集そのほ

かに奔走されたのは博士であつた。

博士は、シドニー大学の招聘に応えて、一九七〇年三月から八月まで、オーストラリアへ出張し、同大学の東洋学科 (Department of Oriental Studies) で講義された。そのかたわら、主として、シドニーにあるミッチェル図書館所蔵のモリソン文書を調査して、モリソンに宛てられた多数の書簡をゼロックスキコピーし、あわせて、現存するモリソンの日記の全部をマイクロフィルムに複写して、東洋文庫へ将来された。ついで、同年一二月から翌年一九七一年一月まで、ふたたびオーストラリアへ出張して、モリソン文書の調査を継続するとともに、キャンベラで開催された第二八回国際東洋学者会議では、その図書部門に日本代表として出席しておられる。

博士は、一九七一年一月、日仏会館から第一回學術使節 (Mission académique) としてパリへ派遣されて高等シナ学研究所 (L'Institut des Hautes Etudes Chinoises) で講演され、翌年一九七二年八月には、日本ユネスコ国内委員会委員に就任して、一九七四年四月までその繁雑な任務をこなされた。

一九七三年七月に、ハーヴァード・ロイエンチン研究所が日本事務局を東京に設立すると、博士はその事務局長となり、一九七五年六月、これが閉鎖されるまでその事務を担

当された。

一九七三年一〇月、トルコ共和国政府は、多年にわたつてトルコの文化・芸術・教育の研究と紹介とに尽くされた博士の功績に報いるため、トルコの共和制宣言五〇周年を記念して、博士に褒状を授与している。なお、同年、国連大学設立準備委員会委員となられた。

博士は、一九七四年四月、東京大学を定年で退官して、財団法人東洋文庫専務理事・研究部長在任のまま、辻直四郎博士に代わつて国立国会図書館支部東洋文庫長兼財団法人東洋文庫図書部長、および、ユネスコ東アジア文化研究センター所長に就任し、そして、同年五月には、東京大学名誉教授の称号を受けられた。

一九七六年五月には、アラブ首長国連邦駐劄日本国大使小高正直氏の招きによって同連邦へ出張し、政府の官吏に「近代日本の出現」について講演されたが、その帰途、チューリッヒ・マドリッド・リスボン・ロンドンそのほかに立ち寄つて、一六世紀以後の東アジアに関する文書の調査に当たられた。六月に帰国すると、このさいの調査に基づいて、リスボンのアジュダ宮殿所蔵の「アジアにおけるイエズス会士（書簡集）」を、東洋文庫員を派遣してマイクロフィルムに撮影させられた。東洋文庫のための蒐書にたいする博士の飽くなき熱意・努力には、あらためて頭の

下がる思いである。

博士は、一九七七年五月、パリ・アジア学会 (Société Asiatique de Paris) の名誉会員に選ばれ、十一月三日、日本政府から紫綬褒章を受章された。

一九七八年二月には、英国アジア学会 (Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland) の名誉会員に選出され、同年一月には、ヘネチア東洋研究所主催の国際シンポジウムに出席して、「Confucian Women in Theory and in Reality」の題目のもとに発表された。

博士は、財団法人東洋文庫理事長辻直四郎博士の御逝去にともない、一九七九年一月、同財団理事長代理となられたが、財団の財政的逼迫は、博士を始めとする方々の万策を尽くしての努力にも拘らず年を追うごとに深刻化して破綻の域に達し、それからの脱却は、理事長代理としての博士の双肩にかかることになった。東洋文庫が、一九八二年三月にその敷地の約半分を三菱地所株式会社、一九八四年三月以後五回にわたつて、東洋文庫が所蔵する岩崎文庫中の広橋家文書の大部分を国立歴史民俗博物館に、さらに、同じく岩崎文庫中の国宝「日本書紀」・「扶桑略記」・「明恵上人歌集」、重要文化財「律」・「令義解」を文化庁に、それぞれ売却して財団の基金に加え、ようやく苦境をほぼ脱し得たのは、博士の最終的決断による。しかし、博士が、

そのころつねに、「白鳥庫吉・和田清両先生を始め多くの先生方が守つて来られた東洋文庫をこのような状態にたち至らせるのは残念に耐えない」と漏らされるのを聞くたびに、この決断を下すまでに博士がいだかれた苦衷をひしひしと感じる私でもであった。

博士は、一九八三年三月、ロンドン大学東洋・アフリカ研究学校の名誉校友に推され、翌年一九八四年三月には、改組刷新された日仏東洋学会の会長に就任された。同年九月、国家公務員の定年制の施行にそなえて国立国会図書館支部東洋文庫長の職から退き、一二月、イタリア中東亜研究所の海外研究員となられた。

一九八五年一月、御講書始の儀において「シルクロード国際貿易史の特質」について進講し、四月二九日、勲二等瑞宝章を受章された。同年六月には、東洋文庫理事長に選出され、一九八六年三月には研究部長を、一九八七年三月には図書部長を辞任しておられる。

博士は、一九八八年三月、龍子夫人の長逝に遭われた。博士は、「略年譜」に、「共に暮すこと四十七年。我をして後顧の憂なく今日に至らしめたるは、偏にその猷身と愛情との賜物なり。(中略)。我は衰朽に鞭つて著述の事に力め、些かなりとも内子の信頼に対えんことを期す」とし、夫人にたいする追慕・感謝の念と御自身の研究の一層

の推進への決意のほどとを吐露しておられる。そのうち、孤独に耐えつつ、なおも、東洋文庫の発展に腐心し、研究にいそしまれる博士の姿を拝見して、怠惰な我が身に反省の鞭うつ私であった。

それからのちも、博士を始めとする方々の、東洋文庫のための蒐書活動は続けられた。

一九八九年二月、白鳥芳郎氏の斡旋により、ベラルデ (E. Velarde) 文庫が将来され、フィリピン諸島に関する東洋文庫の蒐書は格段に充実するに至った。

さらにまた、東洋文庫の蒐書の基礎となったアジア文庫の蒐集者モリソンの子息のモリソン氏 (A. Morrison) から自分の蒐書を手離す用意があるという連絡が博士のもとに届いた。博士は、早速、山本達郎博士、河野六郎博士の協力を得て、この蒐書を購入する交渉を進め、契約が成立して、これは、博士の御他界に先立つこと僅か一〇日、一九八九年一〇月二六日に東洋文庫に到着した。モリソン氏の蒐書は東南アジアを中心としているため、これの購入は、東洋文庫における東南アジア関係の蒐書の貧弱さを補うのに大きな貢献をなした。この、いわゆる第二モリソン文庫の購入が、ついに、博士の東洋文庫のための蒐書活動の最後のものとなったのである。

東洋文庫が、今日、世界の東洋学のメッカとして、内外

の研究者から認められているのは、ひとえに、博士のなみなみならぬ御努力・手腕によると言っても誇大の言では決してない。博士は、「略年譜」の最後に、「思うに我が半生は東洋文庫の経営と維持とに終始し、自らの学業において果すところ憾少しとせず」とのべておられる。東洋文庫は、まさしく、博士の「生命」であつたのである。

「教授たるものの功績の大小は、そのあげた学問的成果の優劣とともに、その育て上げた優秀な研究者の数の多少によつて判断すべきである」とは、フォン・ガベン博士が、かつて私に語られたところであるが、榎博士が東京大学を始め、講師として出講された日本大学・日本女子大学そのほか、また、外国で育成された俊秀が甚だ多数にのぼっていることは、博士を追想するに当たつて、これを忘れてはならない。博士の学的功績は、ただに、東洋文庫にたいするそれにはとどまらないのである。さらに、博士の活動が国際的で、博士が国際協力の推進に多大の役割を果たされたことは上述したところからも察せられるであらう。

博士は御自身の筆になる主要論文をおさめた一〇余巻に達する著作集の出版を意図しておられたが、それを目にすることなく他界された。しかし、この著作集は、目下、河野六郎博士を始め、田中正俊・松村潤・武田幸男諸氏などからなる委員会によつてその編集が進められており、近

く、汲古書院から出版される手筈になつてゐる。出版のあかつきには、それは、我が国のみならず広く世界の東洋学界に大きく貢献し、池田温氏の言の如く、「二〇世紀日本の生んだ稀有の学的成果として不滅の光芒を放つてであらう」。

博士の研究室は、汗牛充棟、さながら図書館の書庫の觀を呈していたが、榎家は、博士の遺志を汲んで、二万八千冊におよぶ博士の全蔵書を東洋文庫へ寄贈された。

博士の御研究は、本来、中央アジア史のそれを中心としており、東京大学から文学博士の称号を取得されたのも、前述の如く「エフタル勃興前後の中央アジア」によつてであつた。この論文をふくめた御著書は東洋文庫論叢の一つとして刊行される予定であつたが、これはついに未刊のままに終わった。以下に、本書の出版の衝に直接当たられた松村潤氏が紹介されたところによつてその目次のみを示し、もつて、博士の主著の一つになる筈であつた本書の内容、および、中央アジア史研究に関して博士があげられた成果の一端をうかがうがうがにしたい。

第一部 エフタル勃興前後の中央アジア。(一)魏書粟特国伝と匈奴・フン同族問題、(二)ソグディアナと匈奴、(三)キターラ王朝の年代について、(四)初期アルメニア史書に見えるエフタルとクシヤン、(五)エフタルの起源とそ

の人種について。

第二部 西域史上の諸問題。(六)大月氏・スキタイ同族考、(七)所謂シノ・カロシユティール錢について、(八)樓蘭の都城の位置とニヤ文書の年代、(九)ササン朝末期の王統に関する兩唐書波斯伝の記載について、(一〇)唐代の拂林国に関する一問題——波斯国魯長阿羅憾丘銘の拂林国——、(一一)成都の石筍と大秦寺、(一二)成都のチベット名について、(一三)宋代の大秦国について、(一四)海青牌のアラビア文字銘文、(一五)乾隆朝の西域調査とその成果——特に西域同文志について——。

第三部 批評と紹介(省略)。

松村氏がのべておられるように、「これらの論考は恩師白鳥庫吉博士の西域史研究の衣鉢を継がれ、さらにそれを発展させたものといえよう」。

博士は、「この内地地域(中央アジア—護)は天山山脈の北において北アジアの草原地帯に連らなり、崑崙山脈の南においてチベット高原に続き、アフガントルキスタンの西にはイラン台地があり、それを越えるとイラク・地中海沿岸の諸地域に至り、東はガンダーラ地方を経てインダス河上流域に接し、インド亜大陸に通じ、東トルキスタンの東南部には中国文化の発祥地である北シナの平原がある。このように、中央アジアが古代の文明地域の接触の中

心であったことは、その地理を一瞥して知られるところであつて、十五世紀末ヨーロッパ人の海路によるアジアとの通商の開始まで、この地域がアジアの交通の核心として繁栄したことは誠に当然である」としるしておられる(「中央アジア・オアシス都市国家の性格」)。博士の研究領域は、この言葉そのままに、中央アジアを中心として東西南北へ拡がってゆき、東西交渉史は勿論、東では中国、さらに日本、西では西アジア、それらの中央ではチベット、北では北アジア、南ではインド・インド洋、はては東南アジア、さらには、東洋学・アジア史・アジア文化一般におよぶに至り、いずれの領域についても、瞠目すべき成果をあげ、或いは、すぐれた批評・紹介の筆をとっておられる。また、東洋文庫を始め、内外の図書館・古文書館に関しても、これらの歴史、訪問のさいの思い出などを語っておられる。文末に付した「榎一雄博士主要論著目録」におさめられているのは、博士の多数の業績のうちのほんの一部にすぎず、よりくわしくは、「榎博士頌寿記念東洋史論叢」の巻頭の「自訂著作略目(一九八八年八月現在)」を参照されたい。ただ、ここで、博士が、一九七四年以後、東方学会の機関誌『東方学』における「海外東方学界消息」の欄の執筆を担当して、学界の動向、新発見の資料そのほかを多岐にわたって紹介し、また、多くの学術誌そのほかにおい

て、八〇数名にのぼる内外の東洋学者の伝記・追憶・追悼文などを執筆しておられることを特筆しておきたい。これらは、主要論文としては、ややもすれば見落とされがちであるが、これらも、博士が最も得意とされた分野の一つであり、博士を追想するに当たっては、これらを無視することはできないからである。

「Kingsize」ところではなく、「empersize」とは、岡正雄博士が、或る学者の学風のスケールの大きさを評された言葉であるが、博士は、まさしく、「empersize」の学者であったのである。

スケールが大きかったばかりではない。博士は、博引傍証、閲読し得る限りのあらゆる関係資料を渉獵して、徹底した実証主義に基づき、精緻・綿密極まる考証、透徹した論理、鋭い史眼、そして、如何なる細事もゆるがせにせぬ着実・周到な態度によって、何時の場合にも、余人の追隨を許さぬ独創的な論文をつぎつぎに公にされた。しかし、執筆された論考中に、博士にとって些かでも瑕疵と思われる箇所があると、それを公刊しようとはされなかった。博士の学問的良心が許さなかつたのである。論著「エフタル勃興前後の中央アジア」の出版に博士が同意されず、それが三校まで完了していながらついに刊行されなかつた大きな理由の一つはここにるのであろう。

博士は、その天賦の才に加うるに終始たゆまぬ努力をもつてした学者であった。

私の記憶に誤りがなければ一九四八年のなかごろのことであつたと思う。前田直典氏の発意によって、東洋史学研究室において、外務省の小川亮作、言語学研究室で助手をつとめておられた柴田武の両氏を、それぞれ、講師に招いて、ペルシア語とトルコ語との講習会が始められた。その聴講者の殆どすべては、兵役から復員してきたばかりの大学院学生と学部学生とであつた。博士は、当時、助教教授であつたが、御自身より遙かに若い学生たちにまじつて、トルコ語の講習会に出席されていた。そのさい、若輩たちとともに熱心にノートに筆を走らせ、時々鋭い質問を發しておられた博士の姿は、いまなお、私の両眼に焼きついて離れない。博士は、後年、トルコ人学者の著書・論文を自由に読みこなして、或るいはその説くところに賛成し、或いはそれを批判しておられるが、博士が、このようにトルコ語を完全にマスターされるに至つたのは、このときの御努力の成果でもあろうか。

博士は第一高等学校でフランス語を第一外国語とする文科丙類に属しておられたためもあつて、フランス語は、博士の得意中の得意とされる言語であつた。しかし、そのほかに、英語・ドイツ語・ロシア語・中国語はもとより、イ

タリア語・スペイン語・アラビア語・ペルシア語、そして、上述のようにトルコ語に精通しておられた。東洋学研究に必要な言語は、殆どすべて、これを自家薬籠中のものとしていたのである。このことは、博士が公にされた論考のうち、幾つかを一読すれば自ずから明らかであろう。東洋文庫に外国人研究者が訪れたさいには、英語・フランス語・イタリア語で自由自在に会話をかわし、歓談される博士であった。

私は、博士の友人の一人であった板倉勝正氏が、かつて、「榎君は、何処か外国へ行くと、そのたびに、短いあいだに、必ずその国の言葉を知得してくる。その努力たるや大したものだ」と漏らされていたのを聞いたことがある。

世に「語学の天才」という言葉がある。博士は、確かに語学にかけても天才であった。しかし、その才能は、孜孜としてたゆまざる日頃の御努力によって見事に開花し、その結果、博士は、類いまれなる polyglot となられたのである。これは単に博士の語学だけではなく、学問全体について言い得ることである。

福井文雅氏は、博士が、面目を改めて發足した日仏東洋学会の会長に就任されたときのことをつぎのように回想しておられる。博士のお人柄を識るために恰好の一エピソードであると思うので、ここに引用させていただく。「実は、榎先生御自身は、(日仏東洋学会の)再發足にはかなり疑問をお持ちであった。(中略)。「日仏間の『窓口』の役を直接果せる機関が、今でこそ更に必要なので」などと云うこちらの説明で、(中略)、納得してくださり、「それでは、形だけでも付けておきますか……」と言って、会長就任を受諾されたのであった。最初はこうして渋っていられた會長職ではあったが、一旦お引受けになられると、一大責任感で終始された。奥様御入院中の大変な時期にも、学会の会へは出席して下さった。(中略)。一昨年の日仏コロックの時、第一部会は、開催予備金の寄付を各方面にお願いしたことがある。その時、ポケット・マネーから真先に多額の寄付を送って下さったのが、榎先生であった。しかもそれは、一般の想像を遙かに超える『巨額』であった。そしてまた、お知り合いの会社社長や財団に働き掛け、紹介もして下さった。そして更に、我々事務局をして真に敬服せしめたのは、その用途について、一切何の注文も追求も、見返りの要求もなかったのである。(中略)。これほど潔い人に、私は未だ嘗つて出会ったことがない」(「通信」日仏東洋学会、一九九〇)。

一九八三年、第三一回国際アジア・北アフリカ人文科学会議が日本で開かれようとしたとき、博士は、初めは、そ

の開催には必ずしも賛成しておられなかった。しかし、ひとたび、その開催が決定すると、博士は、これに積極的に参加し、「資料、出版および内外學術機関に関する情報の交換」と題するコロキアムのコンヴェーナーとなって、「New Asian Studies and the Reorganization of Library」の題目のもとに基調講演を行い、議長をつとめられた。それだけではない。博士は、そのコロキアムのために多額の寄付をされた。これは、私が、博士から直接うかがったところであるから確かな事実であるが、そのさい、博士が、「これは事務局には黙っておいてくださいよ」と言われた言葉が私には印象的にひびいた。

このように、博士は、御自身が納得されないと何事にも参加されないが、一旦、納得されると全力をあげて事に当たり、身銭をきってでもその成功のために尽くされる方であつた。

博士は、風貌・体格ともに威厳に満ち、学問的には御自身にも他人にも厳しかったが、人間的には心根やさしく温情に富んでおられた。一九四八年の五月も終わりに近いころのことであつたと記憶する。私は、微熱がつづき、医師から肺浸潤だと宣せられて、精神的にも大きな打撃を受けた。それを聞き知られた博士は、私に、内村鑑三の「余は如何にして基督信徒となりし乎」を送って、私を励まして

くださった。それは、身心ともにうちひしがれていた私を立ち上がらせるのに大きな刺激となつた。また、資料の閱讀がままならぬのに悩む研究者たちがいるのを知ると、進んで、東洋文庫研究員に採用し、その研究を助けられた。博士は、そうした人柄をそなえておられたのである。

日本のみならず世界の東洋学の進歩と東洋文庫の一層の発展とのために、私どもが今後の博士に期待するところ甚だ大なるものがあつた。その期待も空しく、博士は、忽焉として逝かれた。私どもの痛恨これにまさるものはない。悲しくも博士と幽明境を異にするに至つたいま、博士の安らかなる御冥福を心から祈つてやまない。

榎一雄博士主要論著目録

アジア史・東洋学等一般

- 「英國の東洋学と東洋学者(一・二)」(史学雑誌64—3, 4, 247—261頁, 311—334頁, 1955年3月・4月)
「日本における歴史学の發達と現状(中央アジア・チベント)」(東京 東京大学出版会, 1959年8月刊, 364—371頁)

- 「支那学の起源——ボクサー教授のメントーサー及びビバル
ス研究——」(東方学63, 125—142頁, 1982年1月)
- 「イタリヤ中東亜研究所のバキスタンのアフガニスタンのイ
ランにおける考古学的調査(一, 二)」(東方学52, 130—
143頁, 53, 135—150頁, 1976年7月, 1977年1月)
- 「支那学研究に関する資料の所在について」(昭和49年足利
学校釈奠記念講演筆記, 1—26頁, 足利学校遺蹟図書館,
1975年11月)
- 「1950年の歴史学界——回顧と展望——(東洋史) 東洋史
一般 西域南海その他」(史学雑誌60—5, 424—428, 449
—453頁, 1951年5月)
- 「1951年の歴史学界——回顧と展望——(東洋史) 総説
蒙古・中央アジア」(史学雑誌61—5, 429—434, 468—471
頁, 1952年5月)
- 「1954年の歴史学界——回顧と展望——(東洋史) 総説」
(史学雑誌64—5, 453—456頁, 1955年5月)
- 「1964年の歴史学界——回顧と展望——(東洋史) 総説
(菊池英夫氏と共同執筆)」(史学雑誌74—5, 678—682
頁, 1965年5月)
- 「標準高等世界史(堀米庸三氏と共著)」(東京 講談社,
1963年, A 5判, 351頁)
- 「標準高等世界史(B改訂版(同上))」(東京 講談社, 1969
年, A 5判, 307頁)
- 「東洋史(鎌田重雄, 岸辺成雄氏と共著)」(東京 世界書
院(基礎学選書第12), 1949年, B 6判, 281頁)
- 「東洋史(鎌田重雄氏と分担執筆)」(東京 日照堂, 1966
年4月初版, A 5判, 235頁, 図版・地図・索引(以後数版
を重ね)
- 「El Intercambio cultural de Asia.」(Asia. Anuario de
Estudios Orientales, 1, pp.9-24, 1968)
- 東西交渉史(附 ヲルコニポロ等)
- 「シルクロード国際貿易史の特質」(昭和60年1月8日御講
書始御進講草案, 1985年)
- 「Marco Polo and Japan.」(Oriente Poliano, Roma:
Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1957,
pp.23-44)
- 「ヲルコニポロの近刊本」(東洋学報40—3, 113—126
頁, 1957年12月)
- 「ヲルコニポロ関係文献解説」(第46回東洋文庫展示目錄
(東洋文庫開設35周年記念), 21—32頁, 1959年11月)
- 「ヲルコニポロの財産」(月刊シルクロード4—1, 9—
14頁, 1977年1月)

シルクロードと陸商貿易」(月刊歴史教育 3-5, 50-57
 頁, 1981年5月)
 『シルクロードの美態(上・下)』(思想603, 1294-1314頁,
 606, 1743-1763頁, 1974年9・12月)
 『デカメロンとアジア』(月刊シルクロード 4-3, 27-31
 頁, 1978年4月)
 『チャコモニバトーエルの元帳(紹介)』(史学雑誌67-9,
 993-995頁, 1955年9月)
 『西力東漸の展開』(『東西文明の交流』第五卷:『西欧文明
 と東アジア』, 監修・はしがき・序章 9-18頁, 東京 平凡
 社, 1971年7月(再版, 1980年4月))
 『ポルトガルとオスマントルコ』(月刊シルクロード 4-
 4, 28-32頁, 1978年5月)
 『メキシコ流寓のアジア婦人チーナニボアラナーナのこと』
 (『大隈博士喜寿記念論文集』東京 日本女子大学文学部史
 学研究室, 21-49頁, 1962年11月)
 『イタリヤ商人カルレットイのこと(1-16)』(月刊シル
 クロード, 5-7, 8, 9, 10, 6-1, 2, 3, 4,
 5, 6, 7, 8, 9, 10, 7-1, 2, 1979年8・9, 10,
 11, 12月, 1980年1, 2・3, 4, 5, 6, 7, 8・9,
 10, 11, 12月, 1981年1, 2・3月)
 『商人カルレットイ』(東京 大東出版社, 4+280+23頁,

地図1葉, 1984年10月)
 『東西文明の交流』(『図説中国の歴史』11, 182頁, 講談
 社, 1977年11月初版, 1981年9月3版)
 『漢字の西方伝播(1-4)』(月刊シルクロード 4-6,
 19-24頁, 7, 83-89頁, 8, 28-33頁, 10, 5-12頁,
 1978年7, 8, 10, 12月)
 『ヨーロッパとアジア』(東京 大東出版社, 324頁, 図版
 4頁, 1983年7月)
 『十八世紀フランス流寓の支那人(1-6)』(月刊シルク
 ロード 5-1, 13-19頁, 2, 92-98頁, 3, 34-40頁,
 4, 28-34頁, 5, 28-34頁, 6, 13-19頁, 1979年1,
 2・3, 4, 5, 6, 7月)
 『セリグマン・ベック氏共著『極東古ガラスの分析的研究』
 (紹介批評)』(東洋学報26-2, 322-336頁, 1939年2月)
 『フリッチャード氏『東印度会社・マカートニイ卿往復文
 書』(紹介批評)』(東洋学報25-4, 600-613頁, 1938年
 8月)
 『セデス氏『カムボジアに於ける十二職環の起源』(紹介批
 評)』(東洋学報23-4, 590-604頁, 1936年8月)
 『ヘリチカ氏『シベリア及びアメリカに於ける前歯除抜の
 風習』(紹介批評)』(東洋学報28-2, 309-322頁, 1941
 年6月)

「黎軒・條支の幻人(1—4)」(季刊東西交渉2—1, 12—19頁, 2, 14—25頁, 3, 14—29頁, 4, 14—29頁, 1983年3月, 7月, 9月, 12月)
 「明末のワカオ(1—10)」(季刊東西交渉3—2, 14—23頁, 3, 14—19頁, 4, 14—23頁, 4—1, 14—19頁, 3, 14—19頁, 4, 12—18頁, 5—1, 14—20頁, 2, 14—19頁, 3, 14—21頁, 4, 14—22頁, 1984年6, 9, 12月, 1985年3, 9, 12月, 1986年3, 6, 9, 12月)

東アジア関係

「羅根沢『商君書探源』(批評)」(歴史学研究6—6, 106—113頁, 1936年6月)
 「史記匈奴伝補統説に就いて」(東洋学報26—4, 632—661頁, 1939年8月)
 「史記大宛伝と漢書張騫・李広利伝との関係について」(東洋学報64—1・2, 1—32頁, 1983年1月)
 「On the Relationship between the Shih-Chi 史記, Bk 123 and the Han-Shu 漢書, Bks. 61 and 96.」(Memoirs of Research Department of the Toyo Bunko, XL1, 1983, pp.1-31)
 「漢書西域伝の研究——ワールスウェ・岑仲勉阿氏の近業を

中心として——」(東方学64, 130—142頁, 1982年7月)
 「外国人の記録に見えたる敦煌」(講座・敦煌』第1巻, 245—381頁, 大東出版社, 1980年4月)
 「漢魏時代の敦煌」(講座・敦煌』第2巻, 1—37頁, 大東出版社, 1980年7月)
 「梁職貢図について」(東方学26, 31—46頁, 1963年7月)
 「同上補記」(東方学27, 32頁, 1964年2月)
 「The Oldest Portrait of a Japanese.」(Revista de Historia, No.102, 1975, pp.539-550, with a plate)
 「北京博物館蔵『職貢図巻』」(歴史と旅12—1 (145), 154—161, 163—170頁, 1985年1月)
 「滑国に関する梁職貢図の記事について」(東方学27, 12—32頁, 1964年2月)
 「梁職貢図に関する敦煌集の記事について」(オリエンツ11—1・2, 31—32頁, 1970年1月)
 「梁職貢図の流伝について」(『鎌田博士還暦記念歴史学論叢』東京 鎌田先生還暦記念会, 131—144頁, 1969年9月)
 「職貢図の起源」(『東方学会創立40周年記念東方学論集』, 173—193頁, 1987年6月)
 「The Liang chih-kung-t'u on the Origin and Migration of the Hua or Epthalites.」(Journal of the Oriental

- Society of Australia, VII, 1-2, pp.37-45, 1970)
- 「The Liang chih-kung-t'u 梁職貢図」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XLII, 1984, pp.75-138)
- 「賈耽の地理書と道里記の称とに就いて」(歴史学研究6—7, 81—88頁, 1936年7月)
- 「賈耽著述考補遺三則」(歴史学研究6—10, 1936年10月)
- 「成都のチベット名について」(東洋学報31—1, 135—139頁, 1947年2月)
- 「Mdo=Amdo=Ch'eng-tu」(Orientalia Josephi Tucci Memorial Dicata, Roma; Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1985 [Serie Orientale Roma, LVI, 1], pp.319-323.)
- 「史通の成立について」(国学院雑誌7—3, 107—121頁, 1976年3月)
- 「王韶の熙河経略に就いて」(蒙古学報1, 87—168頁, 1940年7月)
- 「成都の石筍と大秦寺」(東洋学報31—2, 247—261頁, 1947年10月)
- 「増訂元朝秘史関係文献簡目」(東洋学報33—3・4, 441—449頁, 1951年10月)
- 「The Nestorian Christianity in China in Mediaeval

- Time according to Recent Historical and Archaeological Researches.」(L'Oriente cristiano nella storia della civiltà. Problemi attuali di scienza e di cultura, Quaderno, n. 62, pp. 45—47, Roma: Accademia dei Lincei, 1964)
- 「古今形勝之図について」(東洋学報58—1・2, 1—48頁, 附複製地図, 1976年12月)
- 「On the Ku-chin hsing-sleng chin t'u 古今形勝之図 of 1565, with a facsimile reproduction of the map.」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XXXIV, 1976, pp.243-254)
- 「支那関係古地図資料の集積と発現」(東方学54, 141—148頁, 1977年7月, 参照「歴史研究」1978—2, 95—96頁)
- 「董恂の著書特に日記について(1—5)」(近代中国4, 101—119頁, 5, 151—162頁, 7, 88—100頁, 8, 119—129頁, 9, 156—181頁, 1978年10月, 1979年4月, 1980年10月, 1981年6月)
- 「クーリソグとモリソソ——支那百科辞典の編纂刊行を中心として」(長澤先生古稀記念図書論集」東京三省堂, 187—228頁, 1973年5月)
- 「Confucian Women in Theory and in Reality」(La Donna nella Cina Imperiale e nella Cina Repubblicaana a

cura di Lionello Lanciotti, Firenze: Leo S. Olschki Editore, 1980, pp.1-22)

「景德鎮二題」(東方学68, 155—170頁, 1984年7月)

「徐光啓逝去三百五十年」(東方学68, 171—176, 1984年7月)

「清朝学術の一特色——許慎年譜と日知録と——」(東方学71, 152—168頁, 1986年1月)

日本関係

「Origin of the Japanese Empire.」(Bulletin of the Japan Society of London, 1953, pp.19-25)

「Les origines de l'empire du Japon.」(Cahiers d'histoire mondiale, II, 1, pp.26-37, 1954)

「Japan in World History.」(India Quarterly, XII, 4, pp.408-426, 1956, Oct-Nov.)

「魏志倭人伝の里程記事について」(学芸33, 43—48頁, 1947年11月)

「邪馬台國の方位について(上の増補)」(オリエンタリカ1, 63—70頁, 1948年8月及び「論集日本文化の起源」(2) 日本史, 130—138頁, 東京 平凡社, 1971年5月, 又, 佐伯有清編「邪馬台國基本論文集」II, 59—65頁, 創元社,

1981年12月)

「再び邪馬台國の方位について」(歴史公論3, 62—72,

1976年2月)

「富来隆著『魏志邪馬台國の新考察——宇佐「山戸」について』(批評)」(史学雜誌63—12, 1127—1134頁, 1954年12月)

「J. Young: The Location of Yamatai: A Case Study in Japanese Hystography 720-1945. (批評)」(Monumenta Serica, XV II, 1958, pp.486-489)

「邪馬台國(日本歴史新書)」(東京 至文堂, A5判, 208頁, 1960年7月初版)

「邪馬台國(増補版)(日本歴史新書)」(東京 至文堂, A5判, 246頁, 1966年11月初版)

「その後の邪馬台國(これまでの自説の補訂)」(国学院大学日本文化研究所紀要23, 169—184頁, 1969年3月, 季刊邪馬台國28, 24—36頁, 1986年6月)

「邪馬台國に関する孫榮健氏の新説について」(季刊邪馬台國14, 62—73頁, 1982年12月)

「『魏志』「倭人伝」とその周辺——テキストを検討する——」(季刊邪馬台國15, 8—20頁, 16, 51—64頁, 17, 90—108頁, 18, 15—34頁, 19, 54—67頁, 20, 138—150頁, 21, 102—115頁, 22, 168—181頁, 23, 120—131頁, 24,

130—145頁, 25, 91—103頁, 26, 204—218頁, 29, 248—261頁, 30, 210—228頁, 31, 191—205頁, 32, 332—341頁, 33, 235—249頁, 35, 252—266頁, 36, 177—188頁, 37, 222—236頁, 39, 189—201, 41, 204—213頁, 1983年3月, 6月, 9月, 12月, 1984年3月, 6月, 9月, 12月, 1985年3月, 6月, 9月, 12月, 1986年3月, 1987年1月, 4月, 7月, 10月, 1988年5月, 8月, 12月, 1989年8月, 1990年5月)

「太平御覽に引く三國志について」(汲古書院20周年記念論文集, 385—424頁, (近刊))

「『日本書紀』の吐火羅国と含衛」(朝日ジャーナル22—18, 65—67頁, 1980年5月2日)

北アジア・中央アジア・西アジア・南アジア関係

「西アジアの前イヌラーム世界」(『世界史大系』7、20—29頁, 東京 誠文堂新光社, 1959年6月)

「(インド) 西北諸民族の活動」(『世界史大系』6、12—29頁, 東京 誠文堂新光社, 1959年11月)

「中央アジア・オアシス都市国家の性格」(『世界歴史』古代6, 327—358頁, 東京 岩波書店, 1971年1月)

「もう一つのシルクロード——東西交通史上の南アジアニ

スタン」(季刊東西交渉1—2, 15—22頁, 1982年6月)

「レーヴェンタール編『中央アジア叢刊』(紹介)」(東洋学報42—1, 121—125頁, 1959年6月)

「イタリヤ中東亜研究所編『ガンダーラ及び中央アジアの美術』(紹介)」(東洋学報41—2, 280—282頁, 1958年9月)

「イヌラーム総説」(『世界史大系』7、2—19頁, 東京 誠文堂新光社, 1959年6月)

「A History of Central Asian Studies in Japan」(Acta Asiatica, XLII, 1981, 12, pp.95-117)

「近刊満州語書籍目録——特にフランス国立図書館所蔵本目録について——」(東方学61, 146—156頁, 1981年1月)

「The Yüeh-shih-Scythians Identity-A Hypothesis」(International Symposium on History of Eastern and Western Cultural Contacts, Collection of Papers Presented, Compiled by the Japan National Commission for UNESCO, Tokyo, November 1959, pp.75-84)

「A Identidade dos Yüeh-shih com os Citas. Uma Hipótese. (前者の増補)」(Anais do i Colóquio Brasil-Japão (25-27 de Julho de 1966, redigido e organizado pelo Prof. Euripedes Simões de Paula.) São Paula, 1967, pp. 75-84)

「メンヘンニヘルフエン「月氏問題の再検討」(紹介批評)」(史学雑誌59—8, 769—775頁, 1950年8月)

「張鷟の鑿空」(ももんか?25—12, 2—7頁, 1981年12月, 及び国学院雑誌83—2, 46—47頁, 1982年2月, 季刊東西交渉1—4, 16—21頁, 1982年12月)

「Hsieh, Viceroy of the Yüeh-chih. (A contribution to the Chronology of the Kushans.)」(Tsentral'naya Aziya v Kushanskuyu Epokhu, (Trudy Mejdunarodnoi konferentsii po Istorii, Arkheologii i Kult'ure Tsentral'noi Azii v kushanskiu Epokhu, Dushanbe, 27 Sent'yabrya-6 Oktyabrya 1968g) Tom 1, Moskva: Izdatel'stvo "Nauka", 1974, str 265-274)

「月氏の副王謝——クシヤン王朝の年代に関する一應説(上の訂補)」(オリエント10—3, 1—15頁, 1968年11月)

「Hsieh 謝, Fu-wang 副王 or Wang 王 of the Yüehshih 月氏. A Contribution to the Chronology of the Kushans. (上の訂補)」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XXVIII, pp.1-13, 1968)

「小月氏と尉遲氏」(『末松保和博士古稀記念古代東アジア史論叢(下)』, 391—418頁, 吉川弘文館, 1978年3月)

「禺氏辺山の玉」(東洋学報66—1・2・3・4, 109—132頁, 1985年7月)

「大月氏の大尾羊について」(民族学研究14—1, 58—65頁, 1949年1月)

「難兜国に就いての考」(加藤博士還暦記念東洋史集説) 東京 雷山房, 179—199頁, 1941年12月)

「所謂シノニカロシユテイエー銭について」(東洋学報42—3, 237—292頁, 1959年12月)

「On the so-called Sino-Kharoṣṭhi Coins.」(East and West, XV, 3-4, Sept.-Nov., 1965, pp.231-276)

「The Location of the Capital of Lou-lan and the Date of Kharoṣṭhi Inscriptions.」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XXII, pp.125-171, 1964)

「Yü-ni-ch'eng and the site of Lou-lan」(Ural-Altaische Jahrbücher, XXXII, 1-2, pp.52-65, 1961)

「鄯善の都城の位置とその移動について(1)・(2)」(オリエント8—1, 1—14頁, 2, 43—80頁, 1965年4月, 6月)

「楼蘭の位置を示す二つのカロシユテイエー文書について」(石田博士頌寿記念東洋史論叢) 東京 石田博士古稀記念事業会, 107—125頁, 1965年8月)

「楼蘭のミイラ(1—3)」(月刊歴史教育3—5, 20—26頁, 6, 17—21頁, 7, 11—15頁, 1981年5月, 6月, 7月)

「法顕の通過した鄯善国について」(東方学34, 12—31頁,

- 1967年6月)
 「キターラ王朝の年代について」(東洋学報41—3, 283—334頁, 1958年12月)
 「On the Date of the Kidarites. (I, II) (上の増補)」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XXVI and XXVII, pp.1-26, 1-38, 1969 and 1970)
 「匈奴フン同族論の批判——江上波夫著『ユーラシア古代北方文化』(批評)」(東洋文化1, 150—157頁, 1950年2月)
 「魏書粟特国伝と匈奴・フン同族問題」(東洋学報37—4, 1—48頁, 1955年3月)
 「ソグデア人ナと匈奴(1—3)」(史学雑誌64—6, 1—28頁, 7, 31—49頁, 8, 31—54頁, 1955年6, 7, 8月)
 「Sogdiana and the Hsiung-nu(1)」(Central Asiatic Journal 1, pp.43-62, 1955)
 「エツタル民族の起源」(和田博士遷居記念東洋史論叢]東京 講談社, 133—150頁, 1951年11月)
 「The Origin of the White Huns or Hephthalites.」(East and West, VI, 3, pp.231-236, 1955)
 「エツタル民族に於けるイランの要素」(史学雑誌61—1, 1—26頁, 1952年1月)

磯 澤 健

- 「On the Nationality of the Ephthalites.」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XVIII, pp. 1-58, 1959)
 「清国に関する梁職貢図の記事について」(東方学27, 12—32頁, 1964年3月)
 「エツタル民族の人類論について」(東方学29, 1—29頁, 1965年3月)
 「初期アルメニア史書に見えるエツタルヒクシヤン」(東洋学報47—4, 1—56頁, 1965年3月)
 「ベイリイ氏『コータン語のラーマ王物語』」(東洋学報27—3, 449—460頁, 1940年5月)
 「ベイリイ氏『コータン語のラーマ王物語』補訂」(東洋学報28—3, 469—470頁, 1941年8月)
 「Some Remarks on Chieh-shi 羯師. (An Appendix to G. Tucci, On Swat. The Dards and Connected Problems.」(East and West, New Series 27, No.1-2, March-June, 1977, pp.86-91)
 「仲雲族の牙帳の所在について」(鈴木俊教授遷居記念東洋史論叢]東京 鈴木俊教授遷居記念会, 89—102頁, 1964年10月)
 「海青牌のアラビア文字銘文」(考古学雑誌33—11, 497—500頁, 1943年11月)

磯 澤 健 1941年

「傅安の西域奉使について」〔東方学会創立25周年記念東方学論集〕東京 東方学会, 189—200頁, 1972年12月)

「Fu An's Mission to Central Asia.」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XXXV, pp.219—231, 1977.)

「Tsung-lee's Mission to the Western Regions in 1378—1382.」(Oriens Extremus, XIX, 1, 1972, pp.47—53)

「明末の蘭州」〔宇野哲人先生白寿祝贺記念東洋学論叢〕東京 宇野哲人先生白寿祝贺記念会, 281—302頁, 1974年10月)

「Su-chou in Late Ming.」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XXXVI, 1978, pp.145—166.)

「明代の交通」(月刊シルクロード4—2, 22—26頁, 1976年2月)

「職方外紀の中央アジア地理」〔和田田博士古稀記念東洋史論叢〕東京 講談社, 211—222頁, 1961年2月)

「職方外紀の刊本について」〔岩井博士古稀記念典籍論集〕東京 岩井博士古稀記念事業会, 136—147頁, 1963年6月)

「乾隆朝の西域調査とその成果——特に西域同文志について——」(史学雑誌58—3, 265—292頁, 1949年3月)

「Researches in Chinese Turkestan during the Ch'ien-lung K'ang-shih Period with special reference to the Hsi-yü-t'ung-wên-chih 西域同文志.」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XIV, pp.1-46, 1956; Introduction to the Ch'ing-ting Hsi-yü-t'ung-wên-chih 欽定西域同文志 Vol.IV, Tokyo. The Toyo Bunko, 1964, pp.i-xxvii.)

「徐松の西域調査について(1—4)」(近代中国10, 125—148頁, 11, 148—168頁, 13, 167—189頁, 14, 147—166頁, 1981年12月, 1982年9月, 1983年6月, 1983年12月)

「新疆の建省——二十世紀の中央アジア——(1)——(5) (未完)」(近代中国15, 158—190頁, 16, 36—69頁, 17, 75—90頁, 18, 44—59頁, 19, 48—82頁, 1984年7月, 12月, 1985年7月, 1986年2月, 1987年3月 (未完))

「バダクシヤンのラピス=ラズリ(1—3)」(月刊シルクロード, 3—7, 10—14頁, 8, 9—13頁, 9, 10—13頁, 1977年8, 9, 10, 11月)

「薩瑞超の沙漠漫遊記」(月刊シルクロード7—1, 3—13頁, 1981年1月)

「大谷探検隊の意義」(知識21, 108—111頁, 1981年1月)

「中央アジア旅行記(1—20)」(日本古書通信45—6—47)

「中央アジア旅行記(1—20)」(日本古書通信45—6—47)

- 1, 1980年6月~1982年1月, 日本古書通信社)
 「シルクロードの歴史から」(東京 研文出版 234頁, 1979年5月初版, 1983年12月再版)
 「小林学士将来東洋学書目録(ヤペルシア考古鈔本撮影目録(遠峰四郎氏と共著)」(東洋学報32—1, 102—114頁, 1948年10月)
 「近刊近東史関係の入門書及び便覧」(東洋学報37—3, 402—406頁, 1954年12月)
 「ササン朝末期の王統に関する両唐書波斯伝の記載に就いて」(北亜細亚学報1, 103—122頁, 1942年12月)
 「唐代の私菴園に関する一問題——波斯国酋長阿羅憾丘銘の私菴園」(北亜細亚学報2, 203—244頁, 1943年12月)
 「宋代の大菴園に就いて」(史学雑誌56—5, 473—523頁, 1945年5月)
 「Some Remarks on the Country of Ta-chin 大秦 as known to the Chinese under the Sung.」(Asia Major, IV, 1954, 1, pp.1-19)
 「イスラム百科辞典の系譜——イフワーンソニアスニサフア—とテラプロ—を中心として——」(東方学65, 144—167頁, 1983年1月)
 「人間と学としての歴史学——イフソニハルドウソンの場合——」(アラブトヒックス11—4, 4—12頁, 1984年5月), 「西と東と」(前嶋信次先生追悼論文集) 19—31頁, 汲古書院, 1985年6月)
 「アルニイドリースイ一校訂本の刊行」(東方学70, 151—162頁, 1985年7月)
 「アルニイドリースイ一補遺」(東方学71, 178—180頁, 1986年1月)
 「西北科学考察団の学術報告書」(東洋学報29—2, 312—321頁, 1942年5月)
 「ハーラン」[中央亜細亚]」(蒙古学報1, 265—272頁, 1940年7月)
 「フイールド」[イランの民族]」(東洋学報31—3, 406—410頁, 1947年12月)
 「リュセツトニフルノア著, 長沢和俊・伊藤健司訳「シルクロード。絹」(シルク)文化の起源をさぐる」(批評)」(東洋学報62—1・2, 158—171頁, 1980年12月)
 「江上波夫編著「中央アジア史」(批評)」(歴史と地理387, 42—57頁, 1987年11月, 390, 49頁, 1988年2月)
 「イークワラル氏「甘肃省西辺に於ける漢・回・藏三民族の文化的交渉に就いて」」(東洋学報27—3, 441—448頁, 1940年5月)
 「康区藏族の一妻多夫制」(東方学70, 175—193頁, 1985年7月)

図書館・古文書館・書誌関係

Dr. G.E. Morrison and the Toyo Bunko. In Celebration of the Fiftieth Anniversary of the Transfer of Dr. G.E. Morrison Library to Baron Hisaya Iwasaki (1917-1967).] (Tokyo: The Toyo Bunko, 1967, 57pp.; also published in the Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XXV, 1967, and in the East Asian Cultural Studies, VII, 1968.)

「世界のアジア研究における東洋文庫の位置—(一)図書館としての東洋文庫, (二)研究所としての東洋文庫」(国立国会図書館月報167, 2—10頁, 169, 2—11頁, 1975年2月, 4月)

「東洋文庫の六十年」(東洋文庫, 1977年11月, 126頁)

「ミツチェル図書館所蔵のモリソン文書について」(東洋文庫書報2, 1—36頁, 1971年3月)

「北京図書館所蔵敦煌文書の影印によせて(上・下)」(学燈63—5, 23—26頁, 63—6, 12—16頁, 1966年5, 6月)

「Appendix, Chinese Manuscripts」(Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-Huang in the India Office Library, Oxford, 1962, pp.241-269)

「ライオネルニゼヤイルズ氏編『大英博物館蔵敦煌出土支那写本目錄』(批評)」(東洋学報41—2, 272—275頁, 1958年9月)

「A Survey of Bibliographies in Western Languages concerning East and South-East Asian Studies. (In collaboration with Prof. Dr. Tokihiko Tanaka)」(Tokyo. The Centre for East Asian Cultural Studies, The Toyo Bunko, 1967, iv+227 pp.)

学者の追憶

「阿部隆一博士と書誌学」(三田評論843, 88—89頁, 慶応義塾大学, 1983年3月)

「Dr. Mikinosuke Ishida and His Writings.」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XX, pp.1-26, 1961)

「石田幹之助博士の訃」(東方学49, 148—163頁, 1975年1月)

「石田幹之助略伝」(石田幹之助著作集第四卷, 373—396頁, 六興出版, 1986年4月)

「Dr. Hirotsato Iwai and His Writings.」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XX, pp.2-3, 27

- 34, 1961)
- 「小竹武夫氏のこと」(東洋文庫書報14, 1—18頁, 1938年3月)
- 「岡本保孝のこと(上, 下)」(東洋文庫所蔵の特殊本その四, その五)「(東洋文庫書報8, 26—62頁, 1976年, 9, 1—50頁, 1977年)
- 「岡本保孝のこと(補遺)」(東洋文庫書報10, 65—74頁, 1979年3月)
- 「加藤繁先生小伝」(加藤繁著, 榎一雄編『中国経済史の開拓』145—264頁, 東京 桜菊書院, 1948年2月。加藤繁著『支那経済史考証』下巻, 793—879頁, 東京 東洋文庫, 1953年4月初版(1974年4月再版))
- 「加藤繁博士の講義案——東洋文庫所蔵の特殊本(その二)」(東洋文庫書報7, 13—36頁, 東洋文庫, 1976年3月)
- 「先学を語る——加藤繁博士——(座談会, 加藤陽・品川昭代・余村一雄・青山定雄・中嶋敏氏)」(東方学55, 134—162頁, 1978年1月)
- 「桑原博士と東洋学」(『桑原陰蔵全集』月報5, 7—9頁, 岩波書店, 1968年10月)
- 「貝塚さんの示しているもの」(『貝塚茂樹著作集』附録9, 1—4頁, 中央公論社)
- 「先学を語る——白鳥庫吉博士——(座談会, 石田幹之助・植村清二・桑田六郎・白鳥芳郎・石田一郎氏)」(東方学44, 152—182頁, 1972年7月)
- 「白鳥博士自筆原稿四種——東洋文庫所蔵の特殊本(その一)」(東洋文庫書報6, 1—16頁, 1975年3月)
- 「白鳥庫吉著『西域史研究』(上, 下)へのあとがき」(下巻643—663頁, 岩波書店, 1981年3月)
- 「先学を語る——田保橋潔先生——(座談会, 植村清二・森谷秀亮・末松保和・田保橋玉枝・田川孝三・花山信勝・岩生成一氏)」(東方学65, 168—188頁, 1983年1月)
- 「辻直四郎先生の逝去を悼む」(東方学60, 205—210頁, 1980年7月)
- 「徳富氏の蒐書」(汲古創刊号, 1—11頁, 1982年5月, 汲古書院)
- 「長沢規矩也先生を偲ぶ」(書誌学(復刊新)28, 71—75頁, 1981年7月)
- 「中山久四郎博士の学績, 附, 著作目録並びに東洋文庫受贈の遺稿, 書拔類及び図書」(東洋文庫書報6, 44—98頁, 1975年3月)
- 「Obituary Notice—Dr. Yoshito Harada」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XXXII, pp.115—116, 1974)

- 「先学を語る——藤田豊八博士（座談会，福井康順・前嶋信次・曾我部静雄・佐中壮・江上波夫・植村清二・桑田六郎氏）」（東方学63，162—202頁，1982年1月）
- 「学問の思い出——藤原楚水先生を囲んで——（座談会，宇野雪村・谷村憲齋・比田井南谷・鎌田博・石田一郎氏とともに，逗子藤原氏邸において），1983年5月9日」（東方学68，187—208頁，1984年7月）
- 「Dr. Sei Wada and His Writings.」(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, XIX, pp. ix-xix, 1960)
- 「先学を語る——和田清博士——（座談会，山本達郎・市古宙三・岩生成一・森克己・和田久徳氏）」（東方学56，144—167頁，1978年7月）
- 「方豪神父の訃」（東方学62，146—152頁，1981年7月）
- 「羅振玉氏の訃」（史学雑誌51—9，1188—1201頁，1940年9月）
- 「アグノーエル」（「三人の日本学者の逝去」の中，東洋学報59—3・4，124—128頁，1978年3月）
- 「ウエーレイと東洋学」（「国際文化147，24—27頁，1966年9月）
- 「エリセーエフ」（「三人の日本学者の逝去」の中，東洋学報59—3・4，114—117頁，1978年3月）
- 「ゲノーロフ博士の訃」（東洋学報59—1・2，198—206頁，1977年10月）
- 「カールグレン」（「第62回東洋文庫展示会目録」の中，1954年12月）
- 「ローマンニギルジュマン博士の来朝—その人と業績の素描」（日本オリエント学会会報2—9，1—10頁，1959年9月）
- 「ローマンニギルジュマン博士の訃」（東洋学報62—1・2，196—215頁，1980年12月）
- 「グッドリッチ教授の訃」（東洋学報69—1・2，100—116頁，1988年1月）
- 「サイモン教授千古」（東洋学報63—3・4，186—207頁，1982年3月）
- 「アウレリウス・スタイン卿小伝—附著作目録」（東洋学報33—1，102—122頁，1950年12月）
- 「ミルスキイ著『オーレルニスタイン卿伝』を中心として」（東方学55，119—133頁，1978年3月）
- 「デアウニス教授の訃」（東方学68，127—135頁，1984年7月）
- 「トウッチイ教授の訃」（東方学68，136—154頁，1984年7月）
- 「ドミニクセル」（「第62回東洋文庫展示会目録」の中，7

- 23頁, 1954年12月)
「フツクス」(「第62回東洋文庫展示会目録」の中、15—19頁, 1954年12月)
「ペリオの遺稿」(東洋学報32—2, 246頁, 1949年1月)
「ボイタル」(「第62回東洋文庫展示会目録」の中、4—5頁, 1954年12月)
「ボクサー教授の学績」(東方学60, 137—166頁, 1980年7月)
「ボクサー教授著作目録」(東方学70, 163—174頁, 1985年7月)
「フツクリーヴェ氏の訃」(東洋学報52—2, 293—300頁, 1969年9月)
「ムツチヨーリ」(「三人の日本学者の逝去」の中, 東洋学報59—3・4, 117—124頁, 1978年3月)